

はじめに

レキシコンは、私たちの頭の中に蓄積されている語彙のリスト（いわゆる心的辞書）を指します。レキシコンの研究は、語彙がどのような体系をもっているかを見つけ出すことが主な目的となります。問題はどのようにしてレキシコンの研究を進めるかですが、これには様々な方法が考えられます。というのも、言語は複雑な体系をなしているため、どのような視点をとるかにより、見え方が異なってくるためです。さらに言えば、ただ単にデータを見ているだけでは、重要なことを見逃してしまう可能性があります。理論や方法論がないところから何かを見つけだしていくことは不可能ではないにしてもかなりの困難が伴います。このような言語の複雑さゆえに、どのような視点で見てゆくかを決めて研究を進める必要があるのです。

アリストテレスの時代より、言語は長年にわたり研究されてきた対象であり、その結果として言語がどのようなものであるのかという先人の知見が存在します。特に、現代的な言語理論は、分析に用いる概念や仕組みが比較的明確に定義され、様々なことが予測によって検証しやすくなっています。（パラダイムと言ってよいかもしれない）1つの理論的な立場に立つと、ことばに対する見方の方向性が定められ、これまでこうだと思っていたものが、まったく違うように見えてきたり、これまで考えもしなかったような側面に気がついたりすることがあります。また、ほんやりと考えていたことがより鮮明な形で捉えられるようになるかもしれません。理論的な研究なしでは容易にたどり着くことができなかった知見が得られ、その結果として、他の実験的な研究や応用的な研究にも刺激を与え、その分野を進展させることもあります。

レキシコンの研究に限定しても同じことが言え、現代理論からレキシコンを観察すると、従来あまり見えてこなかった語彙の側面が見えてくる可能性があります。レキシコン研究に実験的手法などが持ち込まれ、研究の手法は変化してきているものの、研究の方向性や仮説などを設定する際の理論の果たす役割の重要性を鑑みると、レキシコン理論をもう一度真剣に考えてみる（あるいは再検討してみる）ことには大きな意義があります。

本書には、いくつかの理論的な枠組みから経験的な事実を分析して、レキ

シコンがどのようなものであるのかということを具体的に論じた論文が掲載されています。所収の各論文（査読あり）はそれぞれの理論的な立場から、個々に具体的な言語現象の分析を行っていますが、従来より明確な形で問題設定がなされていることを感じていただけるのではないかと思います。本書に掲載されている論考が今後のレキシコン研究のさらなる発展のきっかけとなれば幸いです。

2019 年 10 月 16 日

岸本秀樹

目 次

はじめに iii

第1章 Swarm 交替現象再考 虎谷紀世子 1

第2章 分散形態論と日本語の補充：
存在動詞「いる」と「おる」の交替 田川拓海 27

第3章 語形成とアクセント 窪蘭晴夫 49

第4章 言語運用における意味計算：
ネクスト・メンションを例に 中谷健太郎・志田祥子 73

第5章 軽動詞構文における意味役割付与のメカニズム 岸本秀樹 99

第6章 語形成への認知言語学的アプローチ：
under-V の成立しづらさと under-V-ed の成立しやすさ
..... 野中大輔・萩澤大輝 127

第7章 Generative Lexicon によるレキシコン研究 小野尚之 153

第8章 言語類型論と認知言語学の観点よりみた英語からの動詞借用：
事例研究を通じて 堀江薫 177

第1章

Swarm 交替現象再考

虎谷紀世子

要旨

本稿は日本語の swarm 交替現象を意味・統語の両面から考察する。まず, Dowty (2000, 2001) を参考に, 交替をおこす動詞の意味的特徴を吟味する。次に swarm 交替現象に1対の構文(「主題主語型構文」と「場所主語型構文」)を想定する Wehmeyer (2017) の提案を概要し, その問題点を指摘する。最後に代案として交替構文の特徴を役割指示文法の枠組みで分析する。Swarm 交替に参加できる動詞は大きく分けて2種類あり(静的状態を表す「Swarm タイプ」と動的状態を表す「音タイプ」), それぞれが「主題主語型構文」・「場所主語型構文」に参加できるようになるためには1対ではなく2対の統語構造を想定する必要があると議論する。

キーワード： 壁塗り交替, 役割指示文法, 移動事象, オノマトペ, 意味・統語リンキング

1. はじめに

英語には‘*Swarm alternation*’ (Levin 1993: 53–55) と呼ばれる交替現象(以下, swarm 交替)がある。それは, (1) に示すように, 動詞 swarm 自体に変化はないが, 主語と前置詞句との間で項の交替がおきるというものである。

- (1) a. Bees are swarming in **the garden**.

第2章

分散形態論と日本語の補充

存在動詞「いる」と「おる」の交替

田川拓海

要旨

尊敬の「られ」に前接する場合に存在動詞「いる」が「おる」という形態になる現象は、現代日本語（共通語）において数少ない典型的な補充現象の1つである。補充形「おる」は尊敬の「られ」や丁寧の「ます」等複数の環境によって引き起こされるが、それが義務的であるか随意的であるかに違いが見られる。これらの性質の異なる複数の環境を組み合わせる「おる」の振る舞いを見ることにより、分散形態論を用いた形態統語的分析と補充形の具現を左右する局所性に関する原理の妥当性を検証することができる。

キーワード： 分散形態論，補充，異形態，存在動詞，尊敬の形式，局所性

1. はじめに

本論文では、(1)に例示されるような現代日本語（共通語）における存在動詞「いる」の補充 (suppletion) に対して、分散形態論 (Distributed Morphology: 以下 DM) を用いた分析を提案する。

- (1) a. 教室に先生がいる。
- b. 教室に先生が {おられます | *いられます}。 (「尊敬」の文脈で)

このように、現代日本語（共通語）では尊敬の「られ」に前接する場合「い

第3章

語形成とアクセント

窪園晴夫

要旨

語形成の中でも複合語は入力のアクセントを保存することが知られているが、複合語以外の語形成過程について出力のアクセントが何によって決まるのか、いまだ体系的な研究は少ない。本章では語形成と音韻構造の関係を概観した上で、複合語、短縮語、頭文字語、愛称語などの形成過程において、出力のアクセントが入力のアクセントに依存しているのか、それとも出力そのものの音韻・形態構造によって決まるのかを分析し、あわせて、言語間・方言間の差異がどの程度観察されるかを考察する。

キーワード： 語形成，アクセント，音節構造，複合語，短縮語，頭文字語，愛称語

1. 語形成と音韻構造

語形成と音韻構造の関係については以下のような問題がこれまで議論されてきた。

- (1) a. 語形成規則の出力を音韻構造がどのように制限するか(音韻制約)
- b. 統語・意味構造が語形成に関わる音韻規則の適用を制限するか(統語制約，意味制約)
- c. 語形成の出力となる音韻構造がどのような原理によって決まるか

第 4 章

言語運用における意味計算

ネクスト・メンションを例に

中谷健太郎・志田祥子

要旨

本稿では、言語運用の研究が言語知識の研究に果たす役割を、意味計算に焦点をあてて考察し、ヒトの言語能力に関する現実的なモデルを構築する際に言語運用に関する知見を考慮することの重要性を指摘する。その上で、心理言語学がレキシコンの研究に提示する諸問題のごく一部を簡単に紹介し、「語彙の意味」と「語用論的推論」、「言語的知識」と「世界知識」がシームレスにつながるモデルを考えることがより適切であると主張する。一例として、ネクスト・メンション選好を取り上げ、言語運用における意味計算の実態を検討する。

キーワード： 言語運用、語彙意味論、語用論的推論、世界知識、主題関係、活動動詞、心理動詞、文完成課題

1. 心理言語学から見た意味論

チョムスキーの認知革命 (Chomsky 1959, 1965) によって言語理論研究のパラダイムシフトが起こって以来、理論言語学の対象は言語運用ではなく言語能力 (言語知識) であり、その使命は言語知識の体系を明らかにすることとされてきた。では、言語運用を観察することが無用かと言えば、事實はまったく逆である。たとえば言語理論の構築にあたっては伝統的に、言語研究者の内省による文法性判断がデータとして用いられてきたが、「ある文に

第 5 章

軽動詞構文における 意味役割付与のメカニズム

岸本秀樹

要旨

本稿では、軽動詞構文に現れる「する」が行為や出来事の意味を表し、項構造をもつことを示す。動作主主語をとる軽動詞構文の「する」は、動作主主語と動詞的名詞および目標を表す目的語に対して意味役割を与え、その他の項は動詞的名詞によって意味役割が与えられる。非動作主構文では、「する」が動詞的名詞にのみ意味役割を与え、その他の項は動詞的名詞によって意味役割が与えられる。「する」の選択する項は節内で意味役割が与えられるが、動詞的名詞の内部で意味役割が与えられる項は、項上昇が起こると節の項となる。この派生の違いは、いくつかの言語現象に反映されることを示す。

キーワード： 動詞的名詞，意味役割，軽動詞，動作主主語，非動作主主語，項上昇

1. はじめに：軽動詞構文

日本語には、動詞的名詞 (VN (verbal noun)) と「する」が組み合わされて作られる軽動詞構文がある。軽動詞構文は、2つの形式が可能である。(1a) は VN が「する」と複合される形式で、(1b) は、VN が対格 (ヲ格) で標示されて、「する」の目的語として現れる形式である。

第 6 章

語形成への認知言語学的アプローチ

under-V の成立しづらさと under-V-ed の成立しやすさ

野中大輔・萩澤大輝

要旨

前半の議論では over-V/under-V の比較を通し、両者はスケールがどのように関わるか（結果状態か行為の産物か）に応じて少なくとも二種類に分けられることを論じる。このうち、結果状態にスケールに関わる under-V は成立しづらいことを指摘し、その要因として未達成の行為は動詞としてコード化されにくいこと、解釈に関わる心的走査の方向が複雑になることを挙げる。後半では、under-V-ed が一定の生産性を持つ構文となっていること、その内部構造は未指定と考えられること、この構文の成立には相応の動機づけが存在していることを論じる。最後に、語形成研究における文脈の重要性を指摘する。

キーワード： 接頭辞 under-、認知言語学、構文形態論、使用基盤モデル、スケール、形容詞的受身、創造的表現、語形成と文脈

1. はじめに

本稿は英語の語形成にまつわる諸問題（成立の動機づけ、生産性、使用文脈）を認知言語学の観点から考察するものである。取り上げる現象は接頭辞 under- が関わる語形成である。まず、反義関係にある over- との比較をしながら、under- の問題を整理する。

英語の動詞接頭辞 over-/under- には、主に二つの用法がある（Bauer et al.

第 7 章

Generative Lexicon による レキシコン研究

小野尚之

要旨

本章は Generative Lexicon による語彙意味論の研究を取り上げ、その成果がレキシコン研究に何をもたらしたか、またその現状と課題について、筆者の研究を踏まえながら論じるものである。Generative Lexicon はレキシコンに登録される情報として言語使用者の世界知識を積極的に取り入れ、語の多義性や含意などを共合成などの合成的な手法によって明らかにする理論である。本章の後半では特に、筆者が取り組んできた名詞の事象性の問題に焦点を当て、これまで明らかになった成果や今後の問題について論じる。

キーワード： 語彙意味論，クオリア，共合成，動作主名詞，する

1. GL による語の意味へのアプローチ

1.1 レキシコンと百科事典

言語の意味論の研究は、どのような言語単位を分析の対象にするかによって、一般的には次の3つのレベル、すなわち、①語の意味論、②文（命題）の意味論、③発話の意味論（語用論）に分けるのが普通である（Lyons 1995 など）。この中で、語の意味を分析対象とする研究領域は、語彙意味論と呼ばれる¹。語彙意味論の目的は、語の意味がどのように構成されるかを探究す

1 「語彙」は本来は語の集合を意味するので、「語の意味論」と称するのが正確である。し

第 8 章

言語類型論と認知言語学の 観点よりみた英語からの動詞借用 事例研究を通じて

堀江薫

要旨

言語類型論の分野は形態統語論現象の類型化を中心に発展し、語彙的現象の類型化に関しては遅れていた。しかし近年いくつかの重要な研究がなされ、語彙類型論の分野でも進展が見られた（例：Koptjevskaja-Tamm 2012, 2015, Päivi and Koptjevskaja-Tamm (eds.) 2016）。ただし、語彙の借用現象に関する言語類型論的研究は Haspelmath and Tadmor (eds.) (2009) という重要な先駆的研究があるものの、未だに整備されているとはいえない。本研究は、筆者がこれまでに言語類型論と認知言語学を複合させた観点より分析を行った英語から日本語（および韓国語）への借用現象の 3 つのケーススタディおよび未発表の知見を提示し、日本語の借用語が今後言語類型論や認知言語学の観点から体系的に研究されるべき興味深い通言語的現象であることを示す。

キーワード： 言語接触，語彙的借用，文法的借用，借用語類型論，動名詞

1. はじめに

形態統語論現象の類型論的研究はグリーンバークの先駆的な研究以来一貫して言語類型論の中核的な研究対象であった（例：Shopen (ed.) 1985, 2007）。それに対して語彙的現象の類型論的研究は後塵を拝してきた。例えば、「世界言語構造地図（The World Atlas of Language Structures, WALs, <https://wals.info/>）」において、形態統語論現象に関する類型論的記載は全 192 項目のうち 155 項